

『親戚のフィリス』再考 ——「祈り」に着目して——

足立万寿子

1 序論

(1) 『親戚のフィリス』の先行研究と拙論での観点

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の中編小説『親戚のフィリス』(*Cousin Phillis*, 1863-64)¹ は、多くのギヤスケル研究家が散文による優れた「田園詩」と称賛している (Ward, ed., Knutsford Edition, vol.7 xiv/Easson, ed., George Barnett Smith 545/海老池訳註 (I) 152 など)。小説の舞台となるホープ農場 (Hope Farm) の庭に咲き匂う花々 (229)、太古以来と思われる悠久の自然の中で賛美歌を歌って一日を終える農作業 (231-32)、農場の家畜とともに生活する毎日 (241)、森の中で手一杯に野花を持って小鳥の囀りをまねするフィリス・ホールマン (Phillis Holman) (289) など、自然や自然の中に生きる人々の姿が美しく描かれている。またフェミニズムないしジェンダー研究の点から、少女であったフィリスが初めて恋をし、それに破れるが、それを経て大人の女性へと成長していく過程に注目した研究者 (Bonaparte 230-31/Stoneman 161-69 など) も多い。

さて、拙論の観点だが、『親戚のフィリス』をキリスト教信仰の点から見直してみたい。理由は、ギヤスケルが確固たるキリスト者、中でもユニテリアンであったことによる。ユニテリアン派教会の教えとは、異豊彦先生の言葉をお借りすると、「キリスト教徒と称しうる最少限の信仰内容を保ち、理性は存分に活用し、他の宗教に対しては最大限に開かれた教会、神に特に嘉された人間としてのイエスを模範とする愛の実践によって信仰は全うされる」(巽 1、136-37) というものである。

ところで、ギヤスケルは友人イライザ・フォックス (Eliza Fox, ?1823-1903) 宛ての手紙 (Chapple and Pollard 108) の中で、自分は三つの自分から成っている、と言っている。それは、第一の自分は神に尽くす自分、第二の自分は家族や社会に尽くす自分、第三の自分は自分自身に尽くす自分、と解釈できよう (足立

2、11-12)。

このようにユニテリアンであり、こういう自己分析をするギヤスケル、特に第一の彼女が書く小説が自然とキリスト教色を帯びるのは当然のことといえよう。『親戚のフィリス』においても「祈る (pray)」、「祈り (prayer)」、「神 (God)」、「主 (Lord)」、「賛美歌 (psalm)」、また聖句が随所に見出されるほど信仰の痕跡に満ちている。

拙論では、「信仰」関係の中でもエベニーザー・ホールマン (Ebenezer Holman) 師の「祈り」に着目し、他の作中人物の言動なども考慮しながらホールマン師の行動や心理の意味を、ひいてはそこに込められた作者ギヤスケルの思いを解明したい。

(2) 『親戚のフィリス』の小説手法のうち、「視点」について

「視点」はポール・マニング (Paul Manning) に置かれている。「語り手」であるポールが「わたし、ないし僕 (I)」として、若い頃 (主に 19～21 歳の間の約 2 年間) を振り返り、ホープ農場での経験を読者に語っていく。しかもポールは作中人物の一人としても行動する。

2 ホールマン師の「祈り」とその意味

(1) ホールマン師の「祈り」の三分類

ホールマン師の「祈り」は、①牧師として教会堂や訪問説教先の信徒の家で行う「公的な祈り」、②使用人や作男を含め家庭内などで行う「半公的・半私的な祈り」、③全く独りで行う「私的な祈り」の三つに分類できよう。拙論では②と③の「祈り」に注目する。

(2) 農作業後の賛美歌合唱

ポールが初めてホープ農場に泊りがけで滞在する日の夕方、ホールマン師はトネリコ畑で麦刈りを終え、鋤をタクト代わりに振りながら、二人の作男や、そこへポールを連れてきた娘のフィリスとともに賛美歌を歌う (231-32)²。牧師本人は当然、フィリスも豊かな声で歌い、作男たちも歌う。この賛美歌を知らないポールは歌えなかったのだが、「たとえ知っていても、見慣れない情景に喉が詰まっ

て歌えなかつただろう」(232) と言い、その後しばらくは放心状態になり、動けなくなる。

広々とした畑、一方には黒い森、もう一方にはトネリコの木々の間を通して青い遠景が広がっている(同)。この情景の中に響く賛美歌に、敬虔な信者でなくとも、自然と一体となっている神聖な存在、つまり神の霊を感じ取るのではないか。ポールは概して牧師との付き合いは避けたく思っている(221, 223) 若者なのだが、その彼が声が出ず、体が動かなかつたのは無意識のうちにそういう霊の作用を感じたためであろう。

キリスト教信仰が生活に溶け込んでいるこの「祈り」から、ホールマン師の心が神と通じ合っており、彼が心の安息を得ている様子が窺える。一方、作男たちを導く有能な農場主として満足しているさまも浮かび上がっている。

(3) ホールマン家の「内輪の夕べの祈り」

麦の刈り株の残る畑で賛美歌を合唱し、農作業を終えた日の晩、使用人や作男たちも含めホールマン家の人々が夕食後、全員が居間に「内輪の夕べの祈り」³に集まっている。滞在客のポールもそこに加わっている。ホールマン師は全員が跪いている輪の中央で跪き、目を閉じ、差し伸べた両手を合わせて、「主の御前に申し上げる (lay before the Lord)」(239) べく、一日の報告を行っている。牧師が飼育している家畜のためにも祈っていることに都会育ちのポールは驚いている。

ホールマン師のこの様子から、彼が病気の牛に汁餌を与える指示を出し忘れたことを反省してはいるが、自分を含め一家が順調なことに満足しているさまが窺える。

(4) ホールズワースの結婚を知った日のホールマン師の「内輪の夕べの祈り」

鉄道技師見習いのポールの上司、ホールズワース (Holdsworth) が鉄道敷設の仕事で急遽カナダへ渡航して9か月ほどしたときのことである。昼食時、ホールマン師は家族の前でホールズワースからの手紙を開き、同封の結婚招待状を見て、その結婚を知る(301)。その後の牧師は落ち着きがない。夕食後、牧師は一家の習慣となっている「内輪の夕べの祈り」を行う(305) が、それについて、ポー

ルはホールマン家に初めて泊まった日の夕食後の場合（拙論2（3）参照）と異なり、詳細に描写していない。つまり、その祈りは形式的なものであったということになる。これは牧師の不安な精神状態を暗示している。

ホールマン師は、「内輪の夕べの祈り」を終えて皆が出て行ったあとポールを呼び止め、フィリスのいつもと異なる様子の原因を問う。ポールが彼女に、ホールズワースの彼女への恋心を伝えたことがあったと答えると、牧師はポールを叱責する。それを漏れ聞いていた彼女がポールを庇うと、牧師は彼女をも咎め、それが彼女の脳炎を引き起こす（307-09）という小説の急展開にさしかかる。

このとき、倒れたフィリスを二階の部屋へ運んだのはホールマン夫人と女の使用人で、医者を呼びに早馬を走らせたのはポールであった。ホールマン師は屈強な体（231）でありながら、フィリスを抱きかかえられないほど腰が抜け、声もかすれる。牧師の精神力の弱さが露呈された出来事であった。

『親戚のフィリス』より5年前に発表されたギヤスケルの短編「マンチェスターの結婚」（“The Manchester Marriage,” 1858）に登場するミスター・オープンショー（Mr. Openshaw）は、自分が意図したのではないが結果的には重婚をしていたことを知ったとき、へたりこみ、声も出ないほど衝撃を受ける。順風満帆で自信満々の彼は絶対間違わないと尊大にも思い込んでいたが、その後謙虚な人間へと変わる（足立3、10-14）。

では、ホールマン師がどのように変わるか、みていこう。

（5）ホールマン師の、フィリス闘病中の「祈り」

フィリスが脳炎に倒れた翌日以降、彼女の回復の兆しが見える日（314）まで、ホールマン師による教会堂や訪問説教先での「祈り」も、ホールマン家内での「内輪の夕べの祈り」も、畑などの屋外での「祈り」も行われぬ。彼はフィリスの重病のため、「公的な祈り」（拙論2（1）参照）も、「半公的・半私的な祈り」も行う気力を失っている。

しかしホールマン師は、妻が看病しているフィリスの部屋の薄暗い片隅に跪き、独り、両手を合わせ熱心に祈る（311）。つまり彼は「私的な祈り」（拙論2（1）参照）は行っている。ポールは牧師の姿を少し開いているドアの隙間から覗き見るが、ドアが閉じられてしまう。

ホールマン師のこの祈りから推測できることは、まず、彼が神にフィリスの回復を願っていることであろう。また、彼はこの事態を招いた自分を振り返り、どこが悪かったのか、つまりどんな「罪 (sin)」を犯しているのか考え、神にも問いかけ、答えを得ようとしていることだろう。

ホールマン師が神に問いかけたと考えられるのは次の状況からである。すなわち、フィリスの病気見舞いを兼ねてロビンスン (Robinson) 師とホジスン (Hodgson) 師がホールマン家に訪問説教にやって来る。ホールマン師は二人の牧師を部屋に通す前にポールに「このようなとき [脳炎に苦しむ娘を看るような苦悩のとき] 魂を助けられるのは神だけだ」(312) と言う。ホールマン師が神に問いかけているからこそ、この発言が出たと思われる。

また、このときホールマン師はポールに訪問説教の場に同席するよう頼む。小説手法の視点がポールにあるので作者ギヤスケルはこう設定したものと思われるが、他方、ホールマン師はこのとき一人で二人の牧師に應對できる自信を失くし、気弱になっていることを示すためもあったと思われる。

ホールマン師は以前、病気の牛の餌の按配を忘れたときには「祝福を求めながらその手立てを忘れるのは偽善だ」(239) と反省したり、「薄ノロ」(245) のティモシー (Timothy) のへまな作業を寢室の窓から見ていて癩癩を起したときには「短気な自分も罪を犯している (I, too, have sinned.)」(同) と反省してはいる。しかしそのような罪はいわば些細な罪といえる。ところが、フィリスが生死の境をさまようほどの重病に倒れる直前にホールマン師がフィリスに発した言葉 (308-09) は極めて身勝手・理不尽で、その行為は些細な罪といって済むようなものではない。

『親戚のフィリス』の7年前に発表されたギヤスケルの短編「聖クララ会修道女」(“The Poor Clare,” 1856) のヒロイン、ブリジエット・フィッツジェラルド (Bridget Fitzgerald) は、「呪いを実現できる能力を自分が具えていると信じて人に不幸がかかるように呪った」(足立2、308) のだから、「重大なことと知りつつ、自由意志から故意に犯す罪」⁴ に堕ちている。

ホールマン師は意図してフィリスを脳炎へ追いやったのではない。しかし彼が娘かわいさのあまりにせよ、また予期せぬことの動転のあまりにせよ、発した酷い言葉によってフィリスが精神的ショックを受け、脳炎を発症したとすると、そ

れは軽々しく「ごめんなさい」と謝って赦されるものではない。彼は独り、妻の看護を受けているフィリスの部屋の隅で祈って、自分の罪に向き合ったものと思われる。

このようにみえてくると、ホールマン師の「祈り」はフィリスの重病まではパフォーマンス的祈りだといえよう。彼は皆の中央にいて、祈りの「先達になって（'leading'）」⁵、言い換えると皆を「導き」、皆に聞こえるように声を出して祈っているからである。しかしフィリスの部屋の隅で祈るのは誰に見せるのでもない、神と自分との誠実で真剣な応答の祈りである。恐らく自分の悪いところをすべてさらけ出しての祈りであったのだろう。その部屋のドアが閉じられれば語り手であるポールには牧師の姿が見えなくなるが、これは作者ギヤスケルの意図であり、ギヤスケルがこの小説で示そうしている「祈り」は、読者も含め他人に見せるようなものではなく、独り、自己を見つめ、神に向かって行うもの、つまり筆者のいう「私的な祈り」ということになるだろう。

ホールマン師はフィリスの病気見舞いに訪れた二人の牧師たちに優越感を感じていたと思われる。ホールマン師は「馬鹿なやつら」と思っていた二人の牧師と異なって、自分は牧師の務めとしての神学・古典語に秀でているだけでなく、数学・農学・力学などにも興味を持ち、その知識を実際の農牧業に活かし、その作業も熱心に行っている優れた農場主だと自負していたことであろう。そのホールマン師がフィリスの重病を期に我が身を振り返り、神にも問いかけ、自分のどういふ点がいけなかったのかを真剣に考え、自分のおごり、至らなさ、弱さに気づいたと思われる。

ところで、ホールマン師がフィリスのことで自分の過ちに気づく機会はそれまでにないわけではなかった。彼は激しい雷雨に二度遭っている（269-70, 294-95）。「稲妻（lightning）」は「至高神の力または怒りの現れ」（フリース 394）であり、「雷（thunder）」は「至高（天空の）神の声で、雷鳴によって怒りや同意を表す」（同 638）とされている。彼はどちらのときもこれを神からの警告とはとらなかった。

しかしこのような神からの警告がなくとも、また高度な教育を受け、学問の深い知識がなくとも、普通の大人ならホールズワースとフィリスの間の恋愛感情を察知したことだろう。例えば、ホールズワースとポールが鉄道敷設の仕事の休憩時間に、リンゴの収穫に向かうホープ農場の人たちの一行に加わる場面である。

果樹園へ行く途中、ホールズワースが少年時代以来見ていなかった花を見つけ、懐かしい、などと言う。リンゴの収穫を終え、ホールズワースとポールが仕事に戻ろうとしたとき、フィリスはその花を草の葉で結わえて花束にし、ホールズワースに差し出し、受け取った彼の目には恋の表情があらわれているのにポールは気づく(273)。しかしホールマン師はその場にいたのに、それに気づく気配はなかった。

この二人の恋愛感情にはホールマン家の使用人のベティ (Betty) も勘づいている。ベティはポールに「あなたの友だち [ホールズワース] がフィリスさんに不実な仕打ちしたちゅうんなら、ただじゃ済まん」(298) と言う。それに対してポールは「彼が彼女に言い寄ったとは思わない」(同) と言うと、ベティは「口じゃ言わんでも目や手が結構胸のうちをあらわすわ。…ご両親はいまだにフィリスさんを子供だと思つとられるけど。…あん人はあたしにお上手言いながら搾りたての牛乳を猫みたいに飲んで。あんなお体裁飾りの人騙しなんぞ大嫌いじゃ」(298-99) と言う。

因みに、このときベティはホールズワースの偽善性だけでなく、フィリスの父母の親ばかさも見抜いている。学問がなくとも、社会的地位が低くとも、ベティはよほど正しく人を見てとっている。

(6) フィリスを見舞いに来たロビンスン師とホジスン師の訪問説教時の「祈り」

ロビンスン師が祈りの「先達になり ('leading')」(注5参照)、ホールマン師に、神のご命令で独り子を屠ろうとしたアブラハムに倣ってフィリスの回復を諦めるように言う (312)。しかしホールマン師はこう応える——「…そのときが来たら、そしてあなた方がおっしゃるような諦めが必要になったら神さまがお力添えくださるでしょう…」(313) と。

それでもなお、ロビンスン師はホールマン師の罪——農場や学問のことにかまけて神を蔑ろにしたこと、娘を偶像視したこと——を認めよと迫る(同)。ホールマン師はこう抗弁する——「わたしの罪は神さまに告白します。だが、もしその罪が極悪のものであろうと…お怒りになった神さまが罪の罰として苦しみをお与えになることはない、というキリストの御言葉をわたしは信じます」(同) と。それに対してホジスン師がロビンスン師に「これは正統な教えでしょうか (Is

that orthodox?)」(同)⁶と尋ねる。

ところで、「イエスの教えを実践しようとするユニテリアンは、新約聖書に記されているように神は慈悲深く、人間を愛する存在と考え、…性善説をとる」(足立2、7)。ユニテリアンのギヤスケルもそう考え、善人が神に受け容れられるのは当然として、罪人も「犯した罪を心から認識し、償おうと努力すれば神に迎えられる」(同8)と信じていたと思われる。ホールマン師と二人の牧師がやり取りするこの場面で、ギヤスケルはこの信念をホールマン師の口を通して言わせたと考えられる。

この二人の牧師が見舞いに来たあと、ポールは次のように言う——「フィリスの見舞いとして訪問してきたのはこの二人の牧師だけだが、近所の皆が毎日、彼女の容態を心配して、屋敷から出てくる誰かに聞いていた。彼らは家のすぐそばまで近寄るほど不躰けではなかった」(314)と。これは、病魔と闘うフィリスへの近所の人たちの配慮と対照させて、ホールマン家へ同情心を見せつけ、高邁な説教を説きながら同家への迷惑も考えず食事が出るまで帰ろうとしない二人の牧師の厚顔さ(312-14)を強調し、彼らの偽善性を示すためだと思われる。山脇百合子先生はご著書『エリザベス・ギヤスケル研究』の中で「形式的宗教は偽善である」(423)と述べておられるが、その通りであろう。

さらに、この二人の牧師を登場させるギヤスケルの意図は世俗的な牧師への風刺だけでなく、彼女が考える神は「旧約聖書にみられる罪深い人間を罰する恐ろしい神でなく、…人間を愛する慈悲の神である」(足立1、5)ことも示すことだと思われる。

(7) ホールマン家での「内輪の夕べの祈り」の再開と、生活そのものが「祈り」

脳炎の峠となる昏睡状態からフィリスが目覚める。その日、ホールマン家では何日も途絶えていた「内輪の夕べの祈り」が行われる(315)。ホールマン師は祈りの「先達になろう」(注5参照)とするが、涙にむせって声が出ない。そこで、ジョン爺(old John)が代わって祈りをあげ、こう言う——「わしらは口じゃなんも言わなかったども、心の中んじゃあ、全霊込めて神さまをほめたたえてきやしたと思うでやす。今夜は神さまも口に出したお祈りはいらんと申されやしょう」(315)と。

このジョン爺の言葉通り、ホープ農場の皆が「口じゃなんも言わなかった」、つまり、これみよがしな祈りの言葉は言わなくとも、心からフィリスの回復を神に祈り、それにふさわしい行動、つまりフィリス回復に必須の熟睡を可能にするために静かにしていようと努力してきた(314)。これをパールの言葉で言えば「静まり返ったこの数日、われわれの生活そのものが無言の祈りだったのだ (...in these silent days our very lives had been an unspoken prayer.)」(315)となる。

祈りとは、牧師が教会堂などで行う「公的な祈り」や、家庭内などで行う「半公的・半私的な祈り」も祈りだが、個人が神に問いかけつつ、自分の行動を真摯に見つめ、どうすれば神のご意思にかなうことができるか、つまり「愛の実践」を行えるかを真剣に考えること、つまり「私的な祈り」も祈りなのだ。これこそ、ギヤスケルがこの小説で示そうとしている「祈り」であろう。

(8) 「祈りの正しい目的」と「神の摂理」とは？

これについて作者ギヤスケルは次のようにポールに言わせる場面を用意している。すなわちフィリスが、脳炎で倒れる3、4か月前のことだが、ポールに「父と相談して、…内輪の夕べの祈りの中に病気のローヴァ (Rover) のことも入れるのを忘れないようにしたの。すると翌日からローヴァが良くなり出したの」(288-89)と言う。それに続けてフィリスはポールを「祈りの正しい目的や神の摂理 (the right ends of prayer, and special providences)」(289)の話に引き込もうとしたが、ポールは頑としてそれには乗らなかった、という場面である。

このようにポールはフィリスの口から直接「祈りの正しい目的や神の摂理」を聞くことはなかったが、3、4か月後それが、拙論2(7)で挙げた「静まり返ったこの数日、われわれの生活そのものが無言の祈りだったのだ」というパールの言葉で具体的に示される。また、「無言の祈り」は「慈悲の神」の耳には届いている、ということだろう。作者ギヤスケルは、それが読者に説教だと思われぬように直接自分では言わないで、パールの口を通して理解されるように小説を巧みに組み立てたと考えられる。

(9) パールの、ホールズワース評価の変化

ポールが上司のホールズワースを「英雄」のように尊敬していたことは、ポー

ルの言葉「僕の英雄崇拜 (my hero-worship)」(243) や「僕の英雄 (my hero)」(254) にあらわれている。

ところが、ポールはホールマン家の人々と接するうちにホールズワースへの見方を変えていく。それを示すのはこの小説の Part II 最後の、ポールが彼へ呼びかける発言、すなわち “It is many years since I have seen thee, Edward Holdsworth, but thou wast a delightful fellow! Ay, and a good one too; though much sorrow was caused by thee!” (266) であろう。ポールが彼をファースト・ネームで呼びかけたことは一度もなく、言及したこともない。常に “Mr Holdsworth” か、“Holdsworth” であり、しかも小説の後半では “Mr” をつけていない。そういう中で、ポールが彼をフル・ネームで呼びかけるのはただ一度、この Part II 最後のみである。発言者が相手をフル・ネームで呼びかけたり、言及したりするときには通常、発言者の相手への断固とした態度や判断を踏まえているものである。しかも、このときポールは彼を “you” でなく、“thou” と呼んでいる。従ってこの呼びかけには、彼はもはやポールの上位にいる「英雄」ではなく、同等か下位になっており、ポールの彼への評価の明瞭な変化が読みとれる。さらに、こう呼びかけるのはホープ農場での出来事から何年も経たのち、つまり若かったポールが人生経験を積んだのちは、もう彼は尊敬に値しない、ということであろう。

人生街道とんとん拍子のホールズワースは、仕事上は有能で、付き合うには楽しい男だが、それを離れると人を真に思いやれるような、ユニテリアンらしい「愛の実践」を行える人物ではない、ということになる。

(10) ベティとティモシーの役割

ベティの役割

ベティについては、すでに拙論 2 (5) で示したように、ホールズワースの偽善性や、ホールマン夫婦の、娘フィリスへの親ばかきを見抜いている。また、ホールマン師が行う「内輪の夕べの祈り」(拙論 2 (3) 参照) の最中、「ぐっすり居眠りしていた」(239) ベティは、ホールマン師のこの祈りが、作者ギヤスケルがこの小説で示そうとしている「祈り」ではないことを暗示しているかのようなのである。さらにベティは、病気が治ったにもかかわらずのらくら横になっているフィリスに「みんながフィリスさんのためにできるだけのことをしたんよ。…じゃのに、

元気を出さんとは！」(316)と喝を入れ、人生の再出発を促しもした。

夏の晴れた日(257)、そのベティが屋外に出て、農場の湧き水で牛乳鍋を洗っているという些細な場面(258)を必要とも思えないのにギヤスケルがわざわざ挿入している。それは、日光が湧き水や金物製の鍋に当たって光っている情景を読者に思い描かせるためであろう。「光(light)」は「キリストを表す」(フリース394)し、「水(water)」は「洗礼の水を表し…、キリストのエンブレムである」(同678)からだ。

ティモシーの役割

フィリスにとって、脳炎の峠となる昏睡状態に陥ったとき、最も必要なのは十分な睡眠であった。そのためにティモシーはホールマン家の屋敷周辺に静寂を保つために、誰に言われたのでもなく、小川の橋の欄干に座り、騒音を立てて市のたつ広場に向かう荷車を朝から夕方まで一日中見張り、荷車にホールマン家の屋敷沿いでない別の道を行くように仕向けている(314-15)。しかもこれは、「まぬけで、知恵足らず」(314)と言われ、へまばかりしているティモシーがホールマン師からついに解雇通知を出された(305)あとのことである。ギヤスケルがこう設定したのは、ティモシーが立っていた小川の「水」がベティの場合と同じく、キリストのエンブレムであるためだろう。また、それは「8月の…暑い日」(314)のことで、日光が川の「水」に当たって「光」っていたことだろう。

ホールマン師に解雇されても、その娘のフィリスのために尽くすティモシーは、本人は自覚していないだろうが、牧師に弱点を悟らせる働きを行っている。それは、ポールがティモシーのこの行動を牧師に伝えたとき、牧師が「神さま、お赦しを。わたくしは自惚れて、自負心が強過ぎました。」(316)と言ったことに示されている。その後牧師はティモシーを再雇用し、呑み込みの遅い彼に「能力に合う仕事を与え、やり方も辛抱強く教える」(同)ようになる。つまり牧師は真の自分を知り、自己抑制のできる、忍耐強い人間へと変わる。

ギヤスケルがホールマン家の使用人のこの二人をこう行動させているのは、ホールマン師のように世間的地位が高くもなく、ホールズワースのように世間的成功を収めていなくとも、誰でも信仰の真髄、つまり「愛の実践」を行動であらわすことは可能だとのメッセージを発するためだと考えられる。ポールの言葉を借りると、ホールマン師に自分の欠点や過ちに気づかせ、危機に陥ったフィリス

を救った「英雄」はベティやティモシーのような普通の庶民であった。

3 結論

ギヤスケルがこの小説で伝えようとしたことは、「祈り」とは神に願うだけの他力的なものでなく、神に問いかけつつ自分を見つめ、どうすれば願いを実現できるか、またそれが神のご意思に沿っているかを考え、それを行動に移す、つまり「愛の実践」を行うためにある、ということ、そしてこの「祈り」はそうしようと努力すれば地位・身分に関係なく誰もが行える、ということだといえよう。

注

* 拙論は第31回日本ギヤスケル協会例会（2019年6月1日、関西学院大学大阪梅田キャンパスにて）での講演（「*Cousin Phillis* 再考——「祈り」に着目して）を基にしている。

講演概要は次の通りである。*Cousin Phillis* における「祈り」の意味を考察する中で、「光」（キリストのエンブレム）の働きに注目し、「光」を注ぐ「英雄」が家族であることを示した。さらに岡山出身の坪田譲治（1890-1982）の童話「河童の話」（1927）に目を向け、この作品においても「光」を点す「英雄」が家族であることを指摘した。キリスト教国に生き、生涯確固たるキリスト者であり、信仰抜きでは存在し得ない作品を残したギヤスケル。一方、仏教や神道の日本に生き、洗礼を受けながらキリスト教の明瞭な痕跡が普通見出せない作品を残した譲二。精神風土や信仰への思いが異なる両作家にこういう共通点を発見したときの筆者の驚きと喜び。これを出発点にしてギヤスケルとともに譲二の文学にも取り組めればと、岡山の住民となった筆者は思う。（拙論では、譲二関連の考察は割愛した）

* *Cousin Phillis* はペンギン版（Peter Keating, ed. *Elizabeth Gaskell: Cranford/Cousin Phillis*, London: Penguin Books Ltd, 1976）を使用する。同書からの引用等の出典は（ ）内にページ数のみを記す。当該箇所のと訳はベティとジョン爺の方言を含め、ギヤスケル著海老池訳註を参照しつつ、拙訳である。

1 題名の和訳には『従妹フィリス』（海老池訳註）などがあるが、拙論では『親戚のフィ

リス』とする。理由は「ポールの母親のまたいとこ」(223)がホールマン夫人であり、同夫人の娘がフィリスである、つまりポールとフィリスの関係は正確には日本語でいう「いとこ」ではないためである。英語の“cousin”は日本語の「いとこ」だけでなく「親戚」の意味もある(足立2、547-48)。

- 2 これは「②…「半公的・半私的な祈り」(拙論2(1)参照)の一つにあたる。
- 3 “... the household assembled for prayer. It was a long impromptu evening prayer;...” (239)より、この「祈り」を「内輪の夕べの祈り」と和訳する。これは「②…「半公的・半私的な祈り」(拙論2(1)参照)の一つにあたる。
- 4 「キリスト教における罪の定義は「悪いことと知りながら自由意志をもって神にそむくこと」である。……彼 [アウグスティヌス] は「われわれが罪を犯すのは二つの理由のいずれかによる。一つは、なすべきことがいまだに分かっていない場合であり、もう一つは、なすべきであると分かっていることをしない場合である。前者は無知 (ignorance) ゆえの罪であり、後者は弱さ (weakness) による罪である」といつている…。…グレゴリウス一世はそれにさらに「故意」(set purpose) による罪を付け加えている。」(巽2、1-2, 7)
- 5 ロビンソン師とホジソン師がホールマン家を訪問説教した際、ロビンソン師が「祈り」を始めるが、それは‘leading’ (312) と表現されている。海老池訳註では「先達になり」(II, 285) と和訳されており、筆者はそれをここで借用した。
- 6 “Is that orthodox?” の和訳は、海老池訳註では「今のは正統の教えですか」(II, 291) で、ユーグロウ著宮崎訳では「聖書にそうかいてあるのかね」(749) である。因みに、ユーグロウ氏は “It is certainly not ...” (Uglove 550) と述べている。

引用文献

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia: Charlottesville, 1992.
- Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, ed. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1967.
- Easson, Angus, ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1991.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: Harvester Press, 1987.
- Uglove, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1974.
- Ward, A.W., ed. *The Works of Mrs. Gaskell*. 8 vols. Knutsford Edition. London: Smith, Elder, & Co., 1906; reprinted, New York: AMS Press, 1972.
- 足立万寿子『エリザベス・ギヤスケル——その生涯と作品』東京、音羽書房鶴見書店、2001。……1
- 『エリザベス・ギヤスケルの小説研究——小説のテーマと手法を基に』東京、音羽書房鶴見書店、2012。……2
- 『エリザベス・ギヤスケルの短編「マンチェスターの結婚」再考——小説のテーマと手法と思想の観点から——』『ノートルダム清心女子大学紀要』外国語・外国文学編 第36巻 第1号(通巻47号)(2012): 1-17。……3
- ギヤスケル, E. C. 著、海老池俊治訳註『従妹フィリス (I) (II)』(研究社新訳註叢書) 研究社、(I)1953、(II)1954。(同書を「海老池訳註」と略す)
- 巽豊彦「ニューマン兄弟とギヤスケル夫人」、石井正之助編『饗宴——英学随想・評論集——』東京、ドルフィンプレス、1990、133-43。……1
- 「宗教小説としての *Ruth*」、日本ギヤスケル協会発行『ギヤスケル論集』第2号(1992):1-10。……2
- フリース, アト・ド著、山下主一郎主幹、荒このみ他9名共訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984。
- 山脇百合子『エリザベス・ギヤスケル研究』(増補版) 東京、北星堂書店、1982。
- ユーグロウ, ジェニー著、宮崎孝一訳『エリザベス・ギヤスケル——その創作の秘密』鳳書房、2007。

(元ノートルダム清心女子大学教授)

***Cousin Phillis* Reconsidered: Focusing on “Prayer”**

Masuko ADACHI

Minister Holman’s “prayer” can be separated into three categories, namely, the public prayer as a minister (①), the half public and half private as a minister and a person in his household (②), and the private as an individual (③). This essay takes the latter two prayers ② and ③ into consideration.

Holman prided himself on being an excellent minister with deep learning in theology and classics, and also on being an able farmer, who could apply his rich knowledge of agriculture and engineering to farming. This is indicated by his prayer ② .

However, he drives his daughter, Phillis, into a critical brain fever by blaming her unreasonably about her first love. In the corner of the room, where his wife is nursing Phillis, he kneels alone in prayer earnestly, and reflects faithfully on what he has said and done, asks God about what has been wrong with him, and recognizes his sins such as self-conceit, impatience, and mental weakness. It is described by his prayer ③ .

Servants in Holman’s household practice an “unspoken prayer” in their lives, for example, by keeping the utmost silence necessary for Phillis’ recovery. In his household, Betty, a maid, and Timothy, a farm laborer, play especially important roles, because by their conduct they symbolize Light and Water, emblems of Christ.

Gaskell, a Unitarian, intends to convey in this novella that regardless of scholastic achievement or social status, anyone can practice “Christ’s Love”, the essential Unitarian teaching, through prayer ③ . That is to say, anyone can practice “Love” by looking deeply into themselves and considering what they should do for themselves and others, asking God as well, during the prayer ③ . The idea is expressed by Phillis’ words, namely, “the right ends of prayer, and special providences”.